



安全な生活のために

7 山に来る資格がない

文●編集委員会

絵●篠崎三朗
しのざきみつお



保

川^{かわ}田^だたちが妙^{みょう}高^{こう}高^{こう}原^{げん}に来たのはおとといである。昨日
は野^の尻^{じり}湖^こに行き、次^①いで一^{いっ}茶^さの跡^{あと}を訪ね、今日は笹^{ささ}ヶ^が峰^{みね}
まで歩いた。そして、明日はいよいよ妙高登山である。

宿の後ろにそびえる妙^{みょう}高^{こう}山^{さん}は標高二千四百五十四メー

トル。これに登るのが今回の一番のねらいで、昨日と今日はその足慣らしでもあった。夕食後、引率^{いんそつ}の先生が、いつものようにみんなを集めて、明日の予定を話した。コースの説明、登り方など、こまごまと話した後で、

「明日は、四時に出発する。起床^{きしょう}は三時二十分。持ち物は今晚中にそろえて、弁当を持てば出かけられるようにし

① 一茶の跡

江戸時代^{えど}の俳人^{こばやし}小林一茶（一七六三年～一八二八年）は、野尻湖のある、今の長野県^{ながの}信濃町^{しなの}に生まれ、晩年を過ごした。